

# チベットにおける『阿毘達磨集論』の伝承

井 上 智 之

チベットにおいて *Abhidharma Samucca* (AS) は唯識文献としてよりはむしろその論の性格から *Abhidharma Kośa* (AK) と並んでアビダルマ論書を代表するものとして重要視されている。プトンリンチェントップ (1290~1364) は、AS の伝承は律とともに前期流伝より綿々と続いている、と伝えているが現在我々の見得る Tib. 大蔵経中のものが必ずしも正確に伝承されてきたとは考え難い節がある。そこで本論では AS に対するチベット人の注釈等を手掛りにチベットにおける AS の伝承状況について若干のアプローチを試みてみたい。

AS チベット訳には、

ci'i phyir phuñ po rnam go rims su blags śe na/ rnam par śes pa'i gnas ñid kyi phyir te/ rnam par śes pa'i gnas bži dañ rnam par śes pa'o// yañ śña ma ni phyi ma'i rten yin pa'i phyir te/ (中略) yañ kun nas ñon moñs pa dañ/ rnam par byañ ba ñid gyi phyir te/ (以下略)

どうして諸蘊が順序付けられるのかというと、識住〔の順序に従っている〕からである。〔つまり〕四識住と識である。或いは、順に前者が後者の拠所であるからであって、(中略) 或いは雑染と清浄であること〔という順序に従っている〕からである。

となっている<sup>1)</sup>。この五蘊の順序に対する説明の内容はインド撰述文献では AS とその注釈にのみ見られるもので、その点でチベットの伝承状況を調べるのに非常に都合良い。この箇所該当するチベット人の注釈を見てみるとロトゥーギェンツェン (1312~1375)<sup>2)</sup>、タルマリンチェン (1364~1432)<sup>3)</sup>、シャーキャチョクデン (1428~1507)<sup>4)</sup>、いずれも上記と同じ内容を伝えている。タルマリンチェンとシャーキャチョクデンとは思想上、対立する2派に各々位置付けられがちであるが今、彼等3人の AS 師資相承の系譜を見てみるとその中に共通してパンロツァーフの名を見出すことが出来るのである。サキャ派の大学者ガワンチュータクによればパンロツァーフは *Khn btus la rnam bśad śes bya gsal byed* を著作しており<sup>5)</sup> 彼が AS の伝承系譜を考える上で重要な役割を果たしていることは間違いなく、今後彼についての詳細な研究が期待される。ところでシャーキャチョクデンはサキャ派の伝承を受けているにもかかわらず同派の論師達にも批判的な面があ

り、むしろサキヤ派内では異端として扱われている。そこで彼がよく批判対象とするコラムパナムセンゲ(1429~1489)の見解を見てみると、この箇所に関しては彼もやはりシャーキヤチョクデン等と同様の説明を伝えているのである<sup>6)</sup>。

これらの一致は AS 自体の内容に依るのであるから当然のことかもしれないが、それに対して後期チベット仏教史をみる上で欠かすことの出来ない人物プトンリンポチュエの AS 注を見ると

rim ni rags dañ kun ñon moñs// snod sogs don khams ji bñin no//

(五蘊の)順序は粗雑と雑染、器等のものと界(の順序)である。

と説かれており、これまでに述べたものとは明らかに内容を異にしているのである<sup>7)</sup>。

このことに関して興味深い記述を『テプゴン』の中に見出せる。『テプゴン』を見ると AS にはイエーシェージュンネよりパンロツァークを経てニャオン、ロトゥーギャムツォに至る師資相承と、同じくイエーシェージュンネよりプトンリンチュエントップに至るという2つの師資相承が在ったことを伝えている<sup>8)</sup>。そしてプトンに至る相承中にはポトンリンツェーという人物が見出せるが、彼はポトンイエー(地名)において AS と AK を説いたとされる<sup>9)</sup>。『テプゴン』には先の相承に続いてポトンイエーが AS の相承を考える上で重要な地域であり、アビダルマや律等の多くの典籍が存在したこと、プトンもここで学んだこと等を述べているのである。

この『テプゴン』の記録を裏付ける資料が *ENCYCLOPEDIA-TIBETICA* の中に見出し得る。プトンの注釈には上記の様な偈頌体の文章が多く引かれており、それを基盤にして論を進めている様であるが、それらの偈頌がポトンパの創始者とされるポトンパンチュエンの伝える偈頌体の AS と完全に一致するのである<sup>10)</sup>。つまり、プトンはポトンイエーに伝わる現存大蔵経中の AS と異なったテキストを用いていたと考えられるのである。ポトンパンチュエンの伝える AS には Skt. 原典があったとは考え難く、恐らくチベットにおいて伝承されてきた AS の内容を暗記し易い様に偈の型にまとめたものであろうが<sup>11)</sup>、その際に幾分他の伝承との混乱が生じたと考えられる。何故なら今、取り上げている「五蘊の順序に対する説明」の箇所の場合、その内容はそのまま偈の型で AK の中に見出すことが出来るのである<sup>12)</sup>。チベットにおいて AS と AK は「上・下のアビダルマ (mñon pa gon 'og)」と呼ばれアビダルマ論書を代表するもので、両者を分離して考えずアビダルマ (Chos mñon pa) の伝承という様に併せて1つのものとして考えられ

る場合が多いので、そのことに起因するものであるのかもしれない。このことについても今後の研究が待たれる。

ところでプトンはテンギェル目録においては、現在我々が用いるイエーシェーデ等訳のASを挙げているにもかかわらず<sup>13)</sup>、何故その内容を用いなかったのだろうか。プトンはテンギェル目録の序文に「以前の諸大目録にあったテキスト(dpe)で現在得られないもの、および、さらに稀観本(dpe dkon pa)で後時に得られるべきものは、それぞれの置かれるべきところに加え入蔵せられるべきである。」(羽田野訳)と述べている<sup>14)</sup>。又、ニンマギェンツェン訳のASBhの奥書からもASが稀観本であったことが想起し得るし<sup>15)</sup>、さらにこのことを示唆する様に、元の帝師、八合思巴(1235~1280)等によって編纂された『至元録』にも「『大乘阿毘達磨集論』七卷無著菩薩造 唐三藏玄奘訳上四論十卷同帙蕃本闕」と説かれている<sup>16)</sup>。そこで仮説として当時ASのテキストが稀観本であったとも考えられるが、しかしやはり最大の原因は先に述べた様な師資相承の系譜にあると思われる。チベット人にとっては実際のテキストよりも、自分が聴聞し学んだ内容の方がより重要なのであり、時にはその聴聞伝承の相違から見解の相違が生じ、それが論争の根拠となることもあった様である。したがって今後、我々がチベット撰述の注釈を読んでいく際にこの様な伝承系譜の問題を充分に考慮する必要があるのではないだろうか。

1) D版 ri. 55b1-4.

2) *Dan pa'i chos mñon pa kun las btus pa'i 'grel pa šes bya gsal snañ ba, Gangtok/* Delhi 1977 p. 407, Ln. 4-p. 408, Ln. 4.

3) 『大谷蔵外目録』No. 10149, Ga. Fol 58r, Ln. 2.

4) *The Complete Works of gSer mdog pañ chen Śākya mchog ldan*, Vol 14, Thimphu 1975, Fol No. 88, Ln. 6-7.

5) *Bod Chen Drug gi gTams*, Thimphu 1979.

6) サキヤ派全書集成 Vol. 12, p. 261-2-2.

7) *Śāta-Piṭaka Series*, Vol. 60, Fol No. 145, Ln. 7.

8) 『青史』四川民族出版社, 1984, p. 419, Ln. 4-p. 421, Ln. 4.

9) 同上, p. 408, Ln. 10-12.

10) *ENCYCLOPEDIA-TIBETIKA*. Vol. 16, Fol. No. 318, Ln. 6-No. 319, Ln. 2.

11) 袴谷憲昭「唯識文献における無分別智」『駒沢大学仏教学部研究紀要』43号 p. 227.

12) D版 ku. 2b6-7.

13) *Śāta-Piṭaka Series*, Vol. 66, Fol. No. 604, Ln. 1-2.

14) *ibid.*, Fol. No. 408, L. 6-7. 15) D版 li. 293a.

16) 昭和法宝総目録第2巻 p. 228 中段七行め~十行め。

(仏教大学大学院)